Emotives and Intonation Orchestrated in Japanese : Affective Relevance Modality

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-09-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 武 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6729

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　No. 51, 平成 31（2019）年 3 月

日本語における感動詞とイントネーションの交響：関連性モダリティの風情

河　野　　武

【キーワード】 日本語，感動詞，イントネーション，関連性，モダリティ

0. 序

人は，目覚めている限り，何らかの気分に包まれている。一人で静かに思いに浸っている時も会話に夢中になっている時も気分から自由になることはない。気分は海流にも擬され，潮流のような触知されない大きな広がりの中にうねりが生じ，大波小波となって次第に感情が輪郭化される。感情は絶え間なく出現と消滅を繰り返す心の中の出来事である。感動詞はそのような今の感情の言語的指標である（河野（2017b）参照）。感情への気づき，感情の質感の読み分け（語彙化），感情のインパクトの査定と意義づけ（例えば意外感や感心・感嘆などの判定），相手の働きかけへの反作用の感情としての応答，発話の生成に関わる感情としてのためらいなどが感動詞の表示対象となる。

感動詞の意味・機能を類別し，喜怒哀楽の感情を取り込み，文化とも相関させながら個々の感動詞を感情の次元に定位づけるのは繊細な作業を要する（Wierzbicka（1999）参照）。まずは，心が感情をどのように受け止め，認知的な背景と化合してどのような変化をもたらすのかその機構を明らかにしなければならない（田窪・金水（1997），定延・田窪（1995），森山（2015）参照）[1]。それのみならず，相手に与える感情への気配り，例えば愛想のよさ，不快感の緩和，発話のやり取りに関わる好ましさの期待の充足なども解明すべき重要な主題となる（Bolinger（1989），河野（2016, 2017a）参照）。また，感情は声質やプロソディ，とりわけイントネーションと一体を成すものであり，個々の感動詞の表出内容はそれぞれの内在的意味・機能とイントネーションの発話モダリティの総和として捉えるべきである。過去の研究では，イントネーションが明確に体系化されておらず，したがって感動詞の記述が不徹底に終わるきらいがあった（田窪・金水（1997），森山（1989, 1997），定延（2015）参照）。

本論では，日本語感動詞の固有の意味・機能を析出し，イントネーションと相互作用してどのように感情を描き出すかを究明する。河野（2011）による関連性モダリティ理論に基づくイントネーションの枠組みを用いる。特に，先行研究では深く考察されてこなかった平板調の役割に光を当て，下降調・上昇調と合わせてイントネーションの表す発話態度の全貌を捉えることを目指す。

1. 感動詞の機能的分類

日本語の感動詞は，発話における機能の観点から大まかに次のような 5 タイプに分類できる。な

お，該当する感動詞およびその形式は代表的なものを列挙する。

ⅰ） 応答
うん／はい／そう；ううん／いいえ／いや
ⅱ） 気づき・気づかせ
あっ／えっ／おっ，ああ／ええ／おお；ほら／そら／それ
ⅲ） 意外感
えっ／はっ，ええ／はあ；あれ／あら／おや
ⅳ） 感心・感嘆
はあ／へえ／ほお，ふうん；ああ／ええ／おお，わあ
ⅴ） ためらい
ああ／ええ；ええと／あのお／ううん／さあ

〈応答〉は相手の質問や依頼・誘い・申し出などへの返答を表し，肯定的応答と否定的応答に分かれる。真偽性判断や発話内容および発話のやり取りに関わる〈好ましさ〉の期待の充足／非充足を表出する（河野（2017）参照）。

（1） A ：お腹空いてる？
B1：うん／はい／そう。
B2：ううん／いいえ／いや。
（2） a．傘どこに置いたんだっけ？　そう，そうだった。車の中だった。
b．いや，まずい！　財布をなくしちゃった。
（3） A：すみません。
B：*うん／はい／*そう。何でしょうか？
（4） A ：きのうはね，
B1：うん／はい／*そう，
A ：私の誕生日だったの。
B2：うん／はい／そう。

(1B1)・(1B2)では肯定・否定の真偽性判断が提示されている。(2a)の「そう」は事態が〈好ましさ〉の期待を満たしていることを表し，(2b)の「いや」はそれを満たしていないことを表す。(3B)は発話の促しの場合であり，(4B1)・(4B2)は相づちの場合であるが，共に肯定的応答詞は談話管理の観点から応答が〈好ましさ〉の期待を満たしていることを表す。三つの肯定的応答詞には細かい使い分けがあることに注意しておきたい（河野（2017），冨樫（2002），串田（2002），定延（2002）参照）。

〈気づき〉は外界の事物の意識化や心に浮かんだことの生き生きした描写である。

（5） あっ／えっ／おっ，花火だ！
（6） あっ／えっ／おっ，そうだ！

3 形式のうちもっとも純粋に気づきを表すのは「あっ」である。「えっ」は〈意外感〉も混在し，

「おっ」は〈感心・感嘆〉も伴う。

〈*気づかせ*〉は相手に対象物への意識を向けさせる合図である。

（7） ほら／そら／それ，満月だよ！
（8） ほら／そら／それ，僕たちもうすぐ金婚式だよ！

〈*意外感*〉は想定外の事態に遭遇したことの表明である。

（9） えっ／はっ，あんないい話断ったの？
（10） えっ／はっ，何だって？　もう一度言ってくれる？

一般的に，（9）のように想定を裏切られことへの驚きを表すが，（10）のように相手の発話を首尾よく受け取れなかったりした場合の困惑も表す。聞き損じや発話内容の難解さや不明瞭性・曖昧性に起因するものである。これは発話が満たすべきもっとも基本的な「関連性」の原則が相手の目算に反してたまたま自分にとっては充足していないと感じられる場合であり，このすれ違いも意外感を生み出す（Sperber and Wilson（1986）参照）。このようにして，エコー発話として，相手に発話を突き返し，関連性評価に関して再考を促すことになる（河野（2011）参照）。「えっ」・「はっ」は意外感の反射的かつ直接的な表明であるが，「あれ」・「あら」・「おや」は意外感が話し手によって内的に吟味されていることを表す。

（11） あれ／あら／おや，あいつがこんな所にいる。
（12） あれ／あら／おや，どうしてあいつがこんな所にいるの？

（11）では，「あいつがこんな所にいる」事態が想定を裏切るものであることの認識の重要性を第一義的に自分に言い聞かせている。そのことはこの発話が独り言としてごく自然であることによっても確かめられる。（もちろん，間接的には相手を巻き込むことも狙っている。）（12）では，そのような想定外の事態が生じた原因に疑念があることを伝えている。この場合も独白であってもよい。

〈*感心*〉は典型的に「はあ」・「へえ」・「ほお」・「ふうん」によって表示され，〈感嘆〉は「ああ」・「ええ」・「おお」・「わあ」によって表示される。感心は相手の発話内容や眼前の状況が賞賛に値するものであり，好ましくかつ印象的に映っている心的状態である。

（13） A：大坂なおみがついにテニスの女王になったよ。
　　B：はあ／へえ／ほお／ふうん，すごいね。

（13B）のような感心が誘発される文脈は，（13A）のような相手の発話のみならずメディアの情報でも目の当たりにしている場面でもよい。〈*感嘆*〉（ないしは〈詠嘆〉）は極端あるいは典型的（時に理想的）と思われる事態に接して深く心を動かされている状態を総称的に指すものとしよう。感嘆の対象はプラス・マイナスいずれの評価にもまたがる。

（14） ああ／ええ／おお／わあ，これは旨い。
（15） ああ／ええ／おお／わあ，また台風が発生したよ。

(14)はプラスの評価を，(15)はマイナスの評価をもつ。またこれらの感動詞間にはかなり明確な表示内容の相違が見られる。「ああ」が中立的な表示内容であるとすると，「ええ」には〈意外感〉も伴っている。「おお」は何らかの基準や規範に基づいた期待が満たされていることを表す。四つの感動詞の中で，抑制された（ないしは距離をおいた）感嘆の雰囲気をもっとも濃厚に留める。「おお」の対極をなすのが「わあ」であり，対象に圧倒された様を手放しで開放的に表出する。やや大げさな感情表出に映ることが多い。

〈ためらい〉は発話生成時におけるフィラーによる時間稼ぎの指標である。

(16)　A ：今何時？
　　B1：ええと／*あのお／ううん，9 時 17 分だよ。
　　B2：さあ／ううん，何時かな？
(17)　*ええと／あのお，ちょっと伺いたいのですが。
(18)　A：あのお，ちょっといいですか？
　　B：ああ／ええ／ううん，ちょっと待ってくれる？

(16B1)・(16B2)のような返答におけるためらいは，「ううん」が制限なく用いられるが，返答にたどり着く見通しがつかない場合には（16B2)のように「さあ」が用いられる。見通しがある場合には(16B1)のように「ええと」は容認されるが「あのお」は排除される。一方，(17)のような依頼の発話においては「あのお」は適格であるが，「ええと」は不適格となる。「ええと」は発話産出に至るためのデータ検索や計算に方向づけができており，目標にたどり着くのが容易であると判断される場合に用いられる。対照的に，「あのお」は発話産出に至るためのデータ検索や計算にまだ方向づけができておらず，目標にたどり着くのが困難であると判断される場合に用いられる[2]。(17)が示すように，「あのお」は発話産出のために丁寧さなどの視点を加えた多元的・総合的な判断がなされていることを示す。

(18B)の「ああ」・「ええ」・「ううん」の表示内容をピンダウンするのはたやすくないが，ここではこれらのためらいは相手の発話を受け取り，発話のスタンスを築くのに必要な「間（ま)」とみなしておきたい。その効用は沈黙（休止）と大差がないように思われるかもしれないが，それでも心の所在を垣間見させることによって相手に何がしかの安心感や親しみを与える効果はある。あえて間をとることは会話に協調的にまた真剣に取り組んでいる証拠ともなる。「ああ」は相手に同調しようとする協調的スタンスを表す。対比的に，「ええ」は相手を見据えた軽い対抗的スタンスを表す。さらに，「ううん」は自分に向けた問題解決への意志的スタンスを表す。発話の「関連性」の観点から言えば，「ああ」は話し手・聞き手の双方に関連的であり，「ええ」は聞き手に，「ううん」は話し手に関連的であると特徴づけることができる。

2. 感動詞の形式

感動詞は基本形（基底形）に様々な音韻プロセスが加わって豊かな音声的変種を生み出している。以下，感動詞の基幹を成す基本形「ああ」・「ええ」・「おお」とその変種について見て行く。まず，基本形は，「ああ」・「ええ」・「おお」のように 2 音節から成り，抑揚形の下降調・上昇調・平板調が崩れることなく明瞭に現れる形とみなしたい。基底形からの第一の脱皮は「あ」・「え」・「お」のような短縮形である。ここでは機能・効果を視野に入れて「きりつめ型」と呼んでおく。この形式

は，1音節というセグメンタルな限定のために下降調・上昇調・平板調は高ピッチHまたは中ピッチMのように中立化せざるをえない。したがって，発話態度は不分明になる。基底形の第二の変容は「はあ」・「へえ」・「ほお」のような声門わたり音 /h/ が付加された形である。頭子音の付加によって感情が勢いよく放出されるような印象が作り出されるので「解放型」と呼ぶ。基底形の第三の変移は「ああっ」・「ええっ」・「おおっ」のような促音，厳密に言えば声門閉鎖音 /ʔ/ の付加された形である。感情の勢いを突然断ち切りエネルギーを溜め込んでいるような感覚をもたらすので「せきとめ型」と称したい。基底形の第四の変化は長音化である。これは，第1音節が長音化される「あーあ」・「えーえ」・「おーお」のような形と第2音節が長音化される「ああー」・「ええー」・「おおー」のような形に分かれる。これは，明らかに感情の広がり（質量）をイコン性に基づいて転写しようとする方略である。ここでは「ひきのばし型」と名づける。以上の変種をまとめて示せば次のようになる。

・基本形：ああ，ええ，おお

ⅰ） きりつめ型
あ，え，お （/aφ/）

ⅱ） 解放型
はあ，へえ，ほお （/haa/）

ⅲ） せきとめ型
ああっ，ええっ，おおっ （/aaʔ/）

ⅳ） ひきのばし型
a） あーあ，えーえ，おーお （/a:a/）
b） ああー，ええー，おおー （/aa:/）

以上は単一形であるが，さらには複数の型が組み合わさった複合形が豊富にある。

ⅴ） きりつめ・せきとめ型
あっ，えっ，おっ

ⅵ） きりつめ・解放型
は，へ，ほ

ⅶ） きりつめ・解放・せきとめ型
はっ，へっ，ほっ

ⅷ） 解放・せきとめ型
はあっ，へえっ，ほおっ

ⅸ） 解放・ひきのばし型
a） はーあ，へーえ，ほーお
b） はあー，へえー，ほおー

ⅹ） ひきのばし・せきとめ型
a） あーあっ，えーえっ，おーおっ
b） ああーっ，ええーっ，おおーっ

ⅺ） 解放・ひきのばし・せきとめ型
a） はーあっ，へーえっ，ほーおっ

b） はあーっ，へえーっ，ほおーっ

このような感動詞の変異形の豊かな貯蔵のおかげで，微妙なニュアンスを伴った聴覚印象（ないしは音表象）が作り出され，感情の肌理が生き生きと伝えられるのである。例えば，「ああっ」を基準にして「あっ」と「あーあっ」／「ああーっ」を較べてみれば，きりつめ型の「あっ」は緊張感が浮き彫りになり，ひきのばし型の「あーあっ」／「ああーっ」は感情のうねりに身を任せた躍動感が鮮明になる。この差は最小対を成す他の場合にも一般的である。例えば，「はああっ」対「はあっ」•「はあーあっ」／「はああーっ」の間にも並行的な聴覚印象の差異が確認できる。感動詞は一般的な語彙項目とは異なり，オノマトペに次いでイコン性が高いので，このような差異は表現効果の観点から見逃すことができない重要な役割をもつと言える。

3. イントネーションの基本形と機能

イントネーションは音声発話の不可分な構成要素であり，発話態度を表す役割を担う。発話は，中身と形の両面から制約を受ける。発話内容は情報価が十分高くなければならず，発話形式はわかりやすく表現効果を上げるものでなければならない。すなわち，Sperber and Wilson（1986）の関連性理論に言う「コンテクスト効果」と「処理努力（コスト）」の充足である。河野（2011）が示すように，イントネーションの基本的な機能は発話の「関連性モダリティ」を表示することにある。関連性モダリティは「関連性判断」と「関連性意識の判断」の二つのモードをもつ。つまり，発話が関連性をもつ（情報価が高く適切である）か否か，あるいは関連性をもつことを意識しているか否かについての話し手の〈主張〉や聞き手への〈質問〉のモードである。

日本語イントネーションの基本的音調形には下降調（F），上昇調（R），平板調（L）がある。

（19） a．今日は１日晴れです。［F］
b．明日は結婚記念日だよ。［R］
c．いただきまーす！［L］

(19a)のような下降調では「この発話は（十全な）関連性をもちます」という話し手の関連性判断の〈主張〉が表されており，(19b)のような上昇調では「この発話が（十全な）関連性をもつことに気づいていますか」という関連性意識の判断についての聞き手への〈質問〉が表されている。いずれにせよ，下降調と上昇調は「発話が（十全な）関連性をもつこと」についての判断のスタンスを表すものである。対比的に，(1c)のような平板調は「発話が控えめな関連性をもつこと」についての判断のスタンスを表すものである。発話が十全ではない控えめな関連性をもつ場合とは，一つは典型的に場面に固定的なお決まりの表現や言わずもがなのことなど情報価が極めて低い事態である。今一つは話し手が情報価が低いように装って意図的に発話の力（効果）を抑制して提示する場合である。以上の抑揚型の示す関連性モダリティのモードを予備的に定式化すれば次のようになる[3]。

（20） 関連性モダリティのモード
ｉ） 下降調：私はこの発話が（十全な）関連性をもつと述べる。（関連性判断の〈主張〉）
ii） 上昇調：私はこの発話が（十全な）関連性をもつことにあなたが気づいているかどうか

をあなたに尋ねる。（関連性意識の判断の〈質問〉）

ⅲ） 平板調：私はこの発話が控えめな関連性をもつと述べる。（関連性判断の〈主張〉）

ここで特に強調しておきたいのは，抑揚は発話を対象にして関連性判断・関連性意識の判断を，そしてそれのみを行うものであって，発話そのものの真偽性判断には直接的には関与しないことである。例えば，次のような疑問文を見てみよう。

（21） a．明日は結婚記念日だったっけ？［R］
　　 b．明日は結婚記念日だったっけ？［F］
（22） a．どうして遅れたの？［R］
　　 b．どうして遅れたの？［F］

(21a)・(21b) は共に「私は明日が結婚記念日だったかどうかをあなたに尋ねます」という真偽性の〈質問〉を表している。また，(22a)・(22b)は共に「私はどうして遅れたかをあなたに尋ねます」という真偽性の〈質問〉を表している。しかし，抑揚はこの発話自体の〈質問〉には関与しない。抑揚はこの〈質問〉発話についての関連性モダリティを表すだけである。したがって，下降調であれば，(20i)の規定のように，この発話を対象とする関連性判断の〈主張〉を表示するし，上昇調であれば，(20ii)の規定のように，この発話を対象とする関連性意識の判断の〈質問〉を表示する。抑揚の表示内容は一見極めて単純に映るかもしれないが，発話の表意と含意を取り込むことで豊かな文脈的倍音を生み出す。

4. 平板調の発話態度

すでに述べたように，平板調は発話が控えめな関連性をもつものとみなす話し手の判断スタンスを表すものである。以下，もう少し詳細に検討して行きたい。平板調の発話態度を鮮明化するために，さしあたって下降調との差異に目を向けてみる。次に挙げる例は特徴的に強い感情を伴った発話である。

（23） こらっ！
（24） ちくしょう！
（25） ああ神さま！
（26） おまえばかだねえ！
（27） わあ，うれしい！

(23)は叱責の発話であるが，下降調には心底，目いっぱい叱る意図が込められているのに対して，平板調には手加減して叱っている雰囲気が感じられる。どちらかと言えば警告のための叱りであり，場合によっては罪は見逃されそうである。(24)はののしりの発話であり，下降調は容赦ないののしりが放出されているが，平板調は感情がやや内向的になり，ゆとりのあるののしりの感が伝えられている。(25)は絶望的な状況における神への祈りのことばである。ここでの下降調はさながら神に面と向かって直接呼びかけているかのような響きをもつ。一方，平板調は心の中での呼びかけであり，独白に傾く。(26)は相手の失態への糾弾の発話であり，下降調では相手のおろかさへの歯に衣

着せぬ非難が伝えられ，平板調ではワンクッション置いた熟考的で冷静な判断（実質的な呆れの情）が示されている。(27)は喜びの表出であるが，前半と後半に現れる二つの下降調は感ずるがままのうれしさの率直な表現となっている。平板調は内向的で，うれしさに浸っている，ないしはうれしさを味わっているニュアンスが生じ，感嘆的な色合いが濃くなっている。上の例に通底するのは，下降調が言うべきことを存分かつ率直に言う発話態度を表すのに対して，平板調は感情に身を任せることなく，適度に抑制を効かせた発話態度を取ることである。

ｉ） 語勢の弱め

平板調の抑制的発話態度を大まかに分類しつつさらに細かに観察してみたい。まず第一に，抑制には語勢を弱め，当りを柔らかくする効果を上げる類がある。行為指示的発話に顕著に見受けられるものである。

(28) 早く行きなさい。
(29) これ食べてみたら？
(30) いっしょに出かけましょう。

(28)のような〈指示〉は性質上相手の都合を考慮しない一方的な発話になりがちである。下降調では話し手の押しつけや非妥協的態度があらわになるが，平板調ではそのような強硬さは和らげられ，優しさが生まれる。(29)は〈提案〉もしくは〈申し出〉の発話であるが，潜在的に相手の利益をもたらすことではあっても，押しつけがましさはできれば回避したいところであろう。ここでの下降調はこの提案発話が（十全の）関連性がある（重要で適切である）こと（つまり関連性判断）の話し手の〈主張〉を表し，上昇調はこの提案発話が（十全の）関連性があることに気づいているかどうか（つまり関連性意識の判断）についての聞き手への〈質問〉を精一杯表している。対比的に，平板調ではこの提案がさして重要性がないかのように扱われ，発話の及ぼす効力を最小限に留めようとする姿勢が示されている。抑制によって tentativeness が強まる。気軽な提案の雰囲気である。(30)は〈勧誘〉の発話であり，(29)と同様の発話態度がイントネーションで表し分けられている。ここでも平板調はさりげない誘いの感触を伝えており，相手が断りにくく受けとらないように配慮されている。

ii） 緊迫性・現実性の弱め

平板調の抑制的発話態度の第二の類に緊迫性・現実性を弱めるものがある。これは，話し手の欲求や願望を表す場合に特徴的に現れるものである。

(31) ああ，ビールが飲みたい！
(32) ああ，お金があればなあ！

(31)は目先の欲求を表し，(32)はやや遠い願望を表しているが，いずれにせよ下降調は緊迫性や現実性（生々しさ）を単刀直入に余す所なく伝えているが，平板調は対象に向かう力が弱く欲求・願望がいわば浮遊している感を伝えている。願いがすぐにはかなえられそうにないことを重々承知している状況である。ここでの欲求・願望はほとんど詠嘆に変容しているとも言える。

ⅲ） 堅苦しさ・深刻さの和らげ

平板調の抑制的発話態度の第三の類として堅苦しさや深刻さを和らげるものが挙げられる。次の例を見てみたい。

(33) こっちにいらっしゃーい。
(34) A：ちょっとお願いしたいことがあるんだけど。
　　B：はーい。
(35) A：このあたりにポストありますか？
　　B：さあ，分かりません。

(33)，(34B)，(35B)においては，下降調では堅苦しさや深刻さが前面に立つ。しかしながら，平板調では対人関係的距離感が狭まり，発話への関わり度が緩められ，それと引き換えに親密さや気軽さ・気さくさが優勢となる。むろんどちらの表情をイントネーションに託すかはひとえに話し手の選択にかかっているが，表情はポーズに過ぎない場合があるので深い読みが必要である。

ⅳ） 情報価の低さ

平板調の抑制的発話態度の第四の類として内在的な情報価の低さを表すものがある。次のようなお決まりの表現が典型である。

(36) a．いただきまーす。
　　b．おやすみなさーい。
　　c．さよーならー。
　　d．すみませーん。

これらの表現は日常的に繰り返される挨拶であり，場面に固定的で新鮮みに欠ける言語形式である。情報価はほとんど無きに等しいと言ってよいが，そうではあってももちろん挨拶はスキップするわけには行かないので，平板調の音調形が一役買うことになる。ここでの平板調の発話態度は，実は第三の類である堅苦しさや深刻さを和らげるものと重なる。平板調のお決まり表現は親密さや気軽さ・気さくさを帯びる。対置される下降調は深刻さ・重々しさを留める。

5. 感動詞とイントネーション

5.1 平板調のモダリティ

今度は感動詞に的を絞って，平板調の抑制的発話態度を先の類別に照らし合わせて検討してみたい。感動詞は話し手の内的感情の吐露を本性とするものであるため，感動詞の抑制的発話態度は緊迫性・現実性の弱めか堅苦しさ・深刻さの和らげに集中し，語勢の弱めはごく稀である。

ⅰ） 緊迫性・現実性の弱め

まずは，主要な類である緊迫性・現実性の弱めの場合から見て行く。この類には広く〈気づき〉・〈感嘆〉・〈感心〉・〈意外感〉が収まる。

(37)　ああ／ええ／おお［L］，花火だ！　〈気づき〉
(38)　ああ／ええ／おお／わあ［L］，これは旨い。〈感嘆〉
(39)　A：大坂なおみがついにテニスの女王になったよ。
　　B：はあ／へえ／ほお／ふうん［L］，すごいね。〈感心〉
(40)　a．ええっ／はあっ［L］，あんないい話断ったの？　〈意外感 1〉
　　b．ええっ／はあっ［L］，何だって？　もう一度言ってくれる？
(41)　a．あれ／あら／おや［L］，あいつがこんな所にいる。〈意外感 2〉
　　b．あれ／あら／おや［L］，どうしてあいつがこんな所にいるの？

〈気づき〉は主体が生起した対象（＝刺激）に触れて反射的に何らかのインパクトを得たことを指す。対象が主体にとってどのような存在であるかによってその意味づけは大きく変わる。対象がなじみのあるものかどうか，興味のあるものかどうか，あるいは文脈的に際立ったものかどうかでインパクトは変動する。(37)について言えば，意外な日時や場所で出会った「花火」はインパクトは大きく，（アミューズメントパークの近隣などで）日常的に経験している「花火」はたいした意味をもたないであろう。また同じ花火に接していても，花火好きの人と平均人とでは意味に大きな差異が生ずるはずである。下降調は〈気づき〉（の対象とプロセス）が重要な意味をもつこと，つまり発話構成素としての当該感動詞の表示内容が額面通りの十全な関連性をもつことの話し手の〈主張〉（保証）を表示するものである。一方，平板調はそれほど重要な意味をもたないこと，つまりやや控えめな，十全とは言えない関連性しかもたないことの話し手の〈主張〉（保証）を表示するものである。手っ取り早く言えば，下降調の気づきは大きい驚きを，平板調は小さい驚きを表す。平板調は表情を抑え，下降調に伴う緊迫性・現実性の度合いを下げるのである。

〈感嘆〉や〈感心〉も同様の特性を示す。肯定的評価であれ否定的評価であれ，万感を込めた感嘆は下降調がふさわしく，一歩引いた感嘆は平板調と調和する。また，他者や事物への賞賛である感心の場合についても，手放しの賛嘆は下降調と馴染み，落ち着いた賞賛は平板調と合う。平板調は感嘆や感心の生々しい熱気，興奮を鎮める役割をもつとも言える。ここで注意しておきたいのは，このような平板調の抑制的態度は必ずしも話し手によって真に意図されたものとは限らないことである。単なる見せかけに過ぎないかもしれないからである。(38)に即して言えば，内心その味を素直に絶賛したい気分であるのに，食べ物についての蘊蓄を傾けたいばかりにあえて控えめな表現を選んでいることもありうる。また，(39)についても，個人的にはいささかも賞賛を惜しまない心境のところ，評論家ぶってあえて冷ややかさを装っていることも考えられる。平板調の表情が真正か見せかけかは文脈に依って推測する他はない。

抑制的発話態度に関する限り，〈意外感〉も異なるところはない。意外感は期待した事態と直面した現実との落差への納得のしがたさ，驚きを内実とするものである。納得のしがたさは上昇調と結びつくが，驚きに比重が置かれれば下降調や平板調を取る。意外感の手放しの表出には下降調がふさわしく，やや距離を置いた表出には平板調が向いている。(40)は相手の行動や発話に触発された意外感であり，(41)は内発的な意外感であるが，抑揚型の発話態度の差は同様に維持される。内発的な意外感の生々しさを平板調によって薄めると独白スタイルが生ずる。

ii）　堅苦しさ・深刻さの和らげ

次に，感動詞の抑制的発話態度の第二のグループとして堅苦しさ・深刻さの和らげの場合を検討してみたい。このグループには〈応答〉と〈ためらい〉が含まれる。以下この順に取り上げる。

(42)　A ：お腹空いてる？
　　B1：うん／はい／そう［L］。
　　B2：ううん／いいえ／いや［L］。
(43)　a．傘どこに置いたんだっけ？そう［L］，そうだった。車の中だった。
　　b．いや［L］，まずい！財布をなくしちゃった。
(44)　A：すみません。
　　B：はい［L］。何でしょうか？
(45)　A ：きのうはね，
　　B1：うん／はい［L］，
　　A ：私の誕生日だったの。
　　B2：うん／??はい／*そう［L］。

応答は肯定・否定の真偽性判断(42B1)・(42B2)，事態の〈好ましさ〉の期待の充足・非充足(43a)・(43b)，発話の促し(44B)，相づち(45B1)・(45B2)といったかなり明確なメッセージを内包した発話の様態である。応答の感動詞の堅苦しさの度合いについては，「うん」対「はい」，「ううん」対「いいえ」のようなくだけた形式と堅苦しい形式を含み，「そう」・「いや」のように中立的な形式も含んでいることから判断すると，下降調の堅苦しさの度合いは標準的であると見てよい。平板調の貢献はくだけたスタイルへの切り替えである。親しさを込めた気楽で気さくな発話態度である。それと同時に，返答はそれほど深刻なものではないことも伝えられる。応答は軽く受け取られることで十分だと感じられる場合である。上の例のすべてについて，平板調が生起する場所では下降調も生起する。唯一分布に偏りが生ずるのは相づちの場合である。文中の相づち(45B1)では「そう」は抑揚型とは関わりなく排除され，「うん」と「はい」は下降調も平板調も容認されるが，文末の相づち(45B2)では「うん」のみが両形を取りうるが「はい」・「そう」は平板調が容認されない。もちろん下降調は問題ない。「うん」は話し手に関連的であり，「はい」は聞き手に関連的，「そう」は話し手・聞き手の双方に関連的であるが（河野（2017）参照），「うん」のみが相手の持ち出した話題に真摯に反応することもさらりと反応することも自由である。しかし，聞き手の関連性が関与する「はい」・「そう」の場合には，軽い応答ではなおざりな印象を与えてしまうのであろう。

次に，堅苦しさ・深刻さの和らげを具現する〈ためらい〉を観察しておく。

(46)　A ：今何時？
　　B1：ええと／ううん［L］，9 時 17 分だよ。
　　B2：さあ／ううん［L］，何時かな？
(47)　あのお［L］，ちょっと伺いたいのですが。
(48)　A：あのお，ちょっといいですか？
　　B：ああ／ええ／ううん［L］，ちょっと待ってくれる？

ためらいは単に言葉に窮していることを述べるだけではなく，遠慮や人当たりのよさを意図することが多い。深い意味を内包しない単純なためらいは，発話の流暢さと効率を阻害するだけであり，言語使用上の言わば必要悪のようなものである。そのような無くもがなのためらいは表出の際にまさに躊躇が伴うであろう。これが平板調の抑制的発話態度，つまり控えめな関連性の主張につながるのである。額面通りの十全な関連性を気兼ねなく主張する下降調との表情の違いは一目瞭然であ

る。ためらいのどっちつかずの主張態度には平板調が理想形であるとみなしてよい。

ⅲ） 語勢の弱め

最後に，平板調の感動詞の抑制的発話態度の第三のグループとして語勢の弱めを検討してみたい。ここに収まるのはわずかに〈気づかせ〉のみである。

（49） ほら／そら／それ［L］，満月だよ！
（50） ほら／そら／それ［L］，僕たちもうすぐ金婚式だよ！

気づかせは，まず自分の気づきがあり，それを発端にして相手に対象物への意識を向けさせる標識であり，感動詞の中で例外的に行為指示的内容を伝えるものである。行為を仕向ける力は下降調と平板調では明瞭に異なる。下降調は直線的な意志の力動を秘めているが，平板調は緩められた作用が隠されている。平板調にあっては，自分の気づきに相手をさりげなく誘い込もうとしている様が見える。

5.2 上昇調のモダリティ

ⅰ） 関連性の不確かさ

感動詞の上昇調の発話態度について下降調と対比しつつ吟味してみたい。次の気づきの「ああ」の例から観察を始めたい。

（51） ああ［R］，花火だ。

ここでの下降調の「ああ」は，気づきの感情内容の全体像が一応満足すべき程度には把握されていて，感情をそのまま受動的に受け入れていることを示唆している。すなわち，下降調の「ああ」は，発話時点で感情内容の同定である「花火だ」を含んでおり，明確化のために遅ればせながら同定を言語化したものである。一方，上昇調の「ああ」は，気づきの感情に巻き込まれてはいるが，感情内容の全体像がまだ把握されておらず，さらに同定すべきことが残されていることを暗示している。すなわち，この「ああ」は「花火だ」のような同定を含んでいない。上昇調の「ああ」は，押し寄せて来た感情の波に抗して，「この感情の中身は何か？」という内的な問いかけを自分自身に投げかけているものと解せる[4]。ここでは，感情的イベントである気づきが，言わば進行形のように継続相がスローモーション化して捉えられていると感じられる。この内的問いかけは話し手の「不確かさ」の反映である。話し手は，このような未確定要素を含む感情内容が，同定を待つまでの一時この場で果たして考慮に値するものかどうか，すなわち「関連性」を満たすものかどうかを自問しているとみなせる。この問いは「この発話の構成素『ああ』は関連性をもつだろうか？」といったものであるが，一般化して定式化すれば次のような形になる。

（52） 上昇調Ⅰ：私はこの発話またはその構成素が（十全な）関連性をもつかどうかをあなたに尋ねる。（関連性判断の〈質問〉）

個々の感動詞の関連性判断は，発話の構成素の位置に特定の感動詞を代入することで得られる。

ここで，ついでながら，(51)から「花火だ」を取り除いた一語発話の「ああ」について付言して

おきたい。上の説明から自然に推論されるように，下降調の場合は，非顕示的ではあるが感情内容の同定がすでに完了していることが伝えられている。一方，上昇調では，同定に向けての内的問いかけが投げかけられただけで閉じられている。このままでは，謎めいていて，聞き手を目の前にしている発話としては不十分な情報提示となる。

上昇調と下降調の差異をもう少し丁寧に見ておきたい。次の対を参照。

(53) a．??ああ［F］，何かな？　そう，花火だ。
　　b．ああ［R］，何かな？　そう，花火だ。
(54) a．ああ［F］，花火さ。
　　b．??ああ［R］，花火さ。

状況は遠くの轟が聞こえてきた場合としよう。また，(53)のそれぞれの発話連続は緊密なユニットを成しており，長い休止で区切られてはいないものとする。それぞれ，後続の発話（断片）は感情内容の同定を表すものである。(53)におけるように，「何かな」のような感情内容に疑義を残す表現とは下降調は不適合を示すが，上昇調は適格なものとなる。逆に，(54)に見るように，確信に満ちた判断であることを表す終助詞の「さ」とは下降調は適合するが，上昇調とは不適合となる。上昇調の要求する「不確かさ」と「さ」が矛盾するからである。

上に見た上昇調の伝える「不確かさ」は気づきの「ああ」に限定されるものではない。他の気づきの感動詞「ええ」・「おお」に作用するのはもちろんのこと，より広汎に〈感嘆〉や〈意外感〉にも影響をもたらす。まず，〈感嘆〉の例を観察しておく。

(55) a．ああ／ええ／おお／わあ［R］，これは旨い。
　　b．ああ／ええ／おお／わあ［R］，また台風が発生したよ。

〈気づき〉とは異なり，〈感嘆〉は対象を刺激として知覚したことに留まらず，対象によって快・不快の情とないまぜに心が揺動された情動を指す。しかし，上昇調の「不確かさ」に関しては，感嘆と気づきは同列である。両者とも感情の中身を同定しようとする姿勢が抑揚に託されている。

次に，同様の上昇調の機能を〈意外感〉の例で確認しておきたい。

(56) a．ええっ／はあっ［R］，あんないい話断ったの？
　　b．ええっ／はあっ［R］，何だって？　もう一度言ってくれる？
(57) a．あれ／あら／おや［R］，あいつがこんな所にいる。
　　b．あれ／あら／おや［R］，どうしてあいつがこんな所にいるの？

意外感は上昇調（および平板調）とよくなじむが，下降調は「あれ」・「あら」・「おや」とは共起するものの「ええっ」・「はあっ」とは共起しない[5]。上昇調の不確かさは「この感情の中身は何か？」という内的な問いかけと表裏一体をなすものであったが，これは納得しがたい事態に接しての意外感と自然に結びつく。下降調には不確かさ（ないしは内的問いかけ）は伴わないので，下降調の「あれ」・「あら」・「おや」は意外感の標識として「関連性」（重要性・適切性）をもつことが平明に主張されるだけである。

ⅱ） 関連性意識の問いかけ

感動詞の帯びる上昇調には，もう一種類，先の(20ii)で提示した相手の「関連性意識」を尋ねる類がある。この関連性モダリティを修正して定式化すれば次のようになる[6]。

(20′) ii′） 上昇調Ⅱ：私はこの発話またはその構成素が（十全な）関連性をもつことにあなたが気づいているかどうかをあなたに尋ねる。(関連性意識の判断の〈質問〉)

この〈質問〉のモダリティが作用する感動詞は〈応答〉,〈ためらい〉および〈感心〉に関わるものである。まず，応答の例から観察してみたい。

(58) A ：お腹空いてる？
B1：*うん／*はい／*そう［R］。
B2：ううん／いいえ／いや［R］。

応答の上昇調は否定的応答に限定されると言う奇妙な偏りをもつが，明らかに(58B2)の上昇調には「不確かさ」は伴ってはいない。ここでは，これらの応答詞が関連性をもつことに相手が気づいているかどうかを問いただしている。むろん，まだ気づいていない様子であれば，気づくように誘うのが最終的な狙いである。とりわけ「ううん」は話し手に関連的であり，「いいえ」は聞き手に，「いや」は話し手・聞き手双方に関連的であると規定される（河野（2017）参照)。なお，応答詞は肯定的・否定的を問わず（平板調と共に）下降調を取りうるが，その発話態度はこれらの応答詞が関連性をもつことの〈主張〉（ないしは保証）を表す。(つまりは「関連性判断」の〈主張〉のモード(20i)を表示する。) いずれにせよ，肯定的応答詞が上昇調を退ける理由は特に見当たらず，日本語における言語使用上の単なる好みとみなすほかない[7]。

上と同様な上昇調の発話態度は〈ためらい〉にも介在する。次の例で確認しておきたい。

(59) A：今何時？
B：ええと／ううん［R］，9 時 17 分だよ。
(60) あのお［R］，ちょっと伺いたいのですが。

一見，上昇調のためらいの感動詞は，本質的に，適切な発話を模索する繋ぎ表現であることを考えると，先に見た「不確かさ」と結びつくように思われるかもしれないが，そうではない。これらの感動詞には「この感情の中身は何か？」という内的な問いかけは伴っておらず，したがって不確かさは生じていない。ここでは，話し手はこれらのためらいの感動詞が関連性をもつことを前提にした上で，そのことに気づいているかどうかを尋ねているのである。あえて相手の関連性意識の状態を問うことで会話への関わりを促しているものと解せる。

〈感心〉の上昇調の発話態度も同様である。次の例を見てみよう。

(61) A：大坂なおみがついにテニスの女王になったよ。
B：はあ／へえ／ほお／ふうん［R］，すごいね。

感心は相手（など）の発話や場面が引き金になって賞賛の情が引き起こされたことを表明するもの

であるから，感心の中身は納得済みであり，十分確信されていると見てよい。したがって，ここでの問いは関連性意識の質問であるとみなすのが理にかなっている。すなわち，感心の感動詞がこの場で関連性がある事実に相手の意識が及んでいるかどうかの確認風の問いかけである。下降調であれば，感心の感動詞がこの場で関連性があることが話し手によって平明に〈主張〉されることになる。なお，ここで感心と同質的に見える〈感嘆〉の上昇調は不確かさを表すものであったことを思い起こしておきたい。感嘆は感心に較べて感情の中身についての確信度が一段低く，したがってその中身を自分自身に問いかける余地が残っているのであろう。

5.3　感動詞の個別的抑揚現象：応答詞の「そう」と主発話内の「そう」の共起と役割分担

一つの発話の中で応答詞の「そう」（以下「そう$_1$」と表記）と主発話内の「そう」（以下「そう$_2$」と表記）は自由に共起する。

(62)　A：来週の月曜は祝日？
　　B：そう$_1$，そう$_2$だよ。
(63)　A：今日は出かけないことにしたよ。
　　B：そう$_1$，そう$_2$なんだ。
(64)　A：［ケーキをおいしそうに食べている相手に］そのケーキおいしいのね？
　　B：そう$_1$，そう$_2$だよ。

最初に「そう$_1$」を観察してみる。(62B)では，「来週の月曜は祝日であること」(P）が真かどうかの相手の質問に真である旨の真偽性判断を提示している。(63B)では，真偽性判断はさておき，相手の主張を「受容」したことを表している。(64B)では，相手による「(相手Bにとって）そのケーキがおいしいこと」(P）の確認のための真偽性判断の求めに応じているが，本質的に相手の考えへの「同意」を表している。以上の「そう$_1$」の3種の下位類のうちここでは「受容」に的を絞ってみたい。

そもそも相手の提示する情報の受容とはどのようなプロセスを伴うものであろうか。イントネーションとも相関させて検討してみよう。

(65)　A ：今日は出かけないことにしたよ。
　　B1：そう$_1$［F］，そう$_2$なんだ。
　　B2：そう$_1$［R］，そう$_2$なんだ。

ここでの「そう$_1$」は相手の発話に接しての最初の反応を表しており，下降調では相手の発話内容を確認し，上昇調では発話内容に疑義を呈している。もう少し肉づけして言えば，下降調は「あなたは本当にそのように言っている（つもりな）のですね」といった相手の発話内容や発話意図の確認を根底に置いていると解される。一方，上昇調は「あなたは本当にそのように言っている（つもりな）のですか？」といった相手の発話内容や発話意図についての話し手の疑念が込められているものと思われる。(65B2)に即して言えば，相手の意思決定が腑に落ちない，やや意外なものであり，発話の背後にある意図自体を問題視しないわけには行かないと感じられている場合の「そう$_1$」の使用である。

今度は，導入部の「そう$_1$」に後続する主発話内の「そう$_2$」に目を転じてみたい。

(66)　A ：今日は出かけないことにしたよ。
　　B1：そう$_1$［F］，そう$_2$なの［F］。
　　B2：そう$_1$［F］，そう$_2$なの［R］？
　　B3：そう$_1$［R］，そう$_2$なの［F］。
　　B4：そう$_1$［R］，そう$_2$なの［R］？

ここでの「そうなの」は異なる派生源に由来する。(66B1)・(66B3)の下降調の「そうなの」は「そうなのだ」の簡略形であり，(66B2)・(66B4)の上昇調の「そうなの」は「そうなのね」の簡略形である。一見したところ，「そう$_1$」と「そう$_2$」の抑揚形の組み合わせは全く自由に見える。「そう$_2$」を埋め込んだ主発話は「そう$_1$」の発話態度を踏まえつつ，念押しのために相手の発話内容についての話し手の認識の様態を明示する役割をもつ。(66B1)では，相手の発話に追随し，提示された事態に同調ないしは納得していることが伝えられる。(66B2)では，いったんは相手の発話に追随する方向に向かったものの，やはり問題の事態に疑問が残ることが表示される。これとは逆に，(66B3)では，相手によって提示された事態への疑問を端緒にしつつ，妥協的に同調に転じつつあることが述べられる。さらに，(66B4)では，提示された事態への疑問はリフレインされており，事態の受け入れがたさが強調されている。このように，「そう$_2$」は先駆けとなる「そう$_1$」の発話態度を強固にしたり，不本意ながら修正したりする働きをもつ。いずれにせよ，「そう$_2$」の抑揚に託された発話態度が相手の発話受容の結論的な姿勢となる。

上の一般的現象にもかかわらず，実は「そう$_1$」と「そう$_2$」の抑揚形の組み合わせには制限が見られる場合がある。次のような文脈での振る舞いを見てみよう。

(67)　A ：私，お客様の担当の辻と申します。
　　B1：そう$_1$［F］，そう$_2$なの［F］。
　　B2：そう$_1$［F］，そう$_2$なの［*R］？
　　B3：そう$_1$［*R］，そう$_2$なの［F］。
　　B4：そう$_1$［*R］，そう$_2$なの［*R］？

初対面の相手の名乗りに応答する場面である。相手の名乗りはそのまま受け取る以外になく，疑義を差し挟むことはまずありえないであろう。したがって，通常の文脈では，「そう$_1$」は下降調のみが適格となり，上昇調は排除される。それのみか，後続する「そう$_2$」も下降調が適格，上昇調が不適格となる。一般化すれば，「そう$_1$」が下降調のみを容認する場合には「そう$_2$」も下降調でなければならないと規定できる。あるいは，別の角度から言うと，「そう$_1$」が上昇調を容認しない場合には「そう$_2$」も上昇調であってはならないとなる。このように，「そう$_1$」の支配的な発話態度が「そう$_2$」の発話態度を拘束するのはかなり特殊な場合であると言ってよい。なお，「そう$_1$」・「そう$_2$」のいずれか一つが表出された場合には，「そう$_1$」も「そう$_2$」も一貫して下降調のみを帯びることにも注意しておきたい。

6. 結　論

本論の論点をまとめれば次のようになる。1) 感動詞は応答，気づき・気づかせ，意外感，感心・感嘆，ためらいに分類される。2) 感動詞の音形は基本形に音韻的操作が加わって，きりつめ型，

解放型，せきとめ型，ひきのばし型，およびそれらの複合型が変種を形成する。3）イントネーションは発話の「関連性モダリティ」を表示し，「関連性判断」と「関連性意識の判断」の二様をもつ。4）基本的抑揚型は下降調，上昇調，平板調から成り，下降調は発話およびその構成素が十全な関連性をもつことの関連性判断の〈主張〉を，上昇調は関連性判断ないしは関連性意識の判断の〈質問〉を，平板調は発話およびその構成素が控えめな関連性をもつことの関連性判断の〈主張〉を表す。5）平板調の抑制的発話態度は，語勢の弱め，緊迫性・現実性の弱め，堅苦しさ・深刻さの和らげ，情報価の低さの表示の効果をもたらす。6）平板調は〈気づき〉・〈感嘆〉・〈感心〉・〈意外感〉には緊迫性・現実性の弱めをもたらし，〈応答〉・〈ためらい〉には堅苦しさ・深刻さの和らげを，〈気づかせ〉には語勢の弱めをもたらす。7）上昇調は〈気づき〉・〈感嘆〉・〈意外感〉には関連性判断の自分に向けた〈質問〉のモードで関連性の不確かさを表し，〈応答〉・〈ためらい〉・〈感心〉には関連性意識の判断の〈質問〉を表す。8）応答詞の「そう$_1$」と主発話内の「そう$_2$」が共起すると，「そう$_1$」の下降調は相手の発話内容の確認を表し，上昇調はそれへの疑念を表す一方で，「そう$_2$」は念押しのために下降調では発話内容の受容を表し，上昇調では受容の保留を表す。

本論では，感動詞の表す感情を総体的にまたやや図式的に扱い，喜び・悲しみ・怒り・恐れといった個別の感情に深入りすることはなかったが，気づきにせよ感嘆にせよ特定の感情とない交ぜになっていることは当然視している。本論の考察結果と Wierzbicka（1999）で提示された個別の感情（概念）の意味論との突き合わせは別途の考察が必要である。また，感情の生起機序についての心理学的モデルとの整合性についてもさらなる考究を待たなければならない（遠藤（2013）を参照）。それにしても，感情なるものは，芸術家にとっても学徒にとっても実にやっかいな相手である。

《注》

1　心理学による感情の定義には次のようなものがある。

> Emotions are elicited when something happens that the organism considers to be of relevance, by being directly linked to its sensitivities, needs, goals, values, and general well-being … Among the chief criteria for appraisal of relevance are the novelty or unexpectedness of a stimulus or event, its intrinsic pleasantness or unpleasantness, and its motivational consistency, i.e. its conduciveness to respond to a sensitivity, satisfy a need, reach a goal, or uphold a value, or its 'obstructiveness' to achieving any of those.
>
> （Sander and Sherer eds.（2009: 143））
>
> ［感情が引き出されるのは，主体によって「関連性」があるとみなされる事態が感覚，欲求，目標，価値，一般的安寧と直接的に結びつけられて生起する時である。（中略）関連性評価の主な基準には，刺激・事態の新奇さや意外さ，その内在的快・不快，動機づけの一貫性などが含まれる。動機づけの一貫性によって，感覚への反応，欲求の充足，目標の到達，価値の支持といった行為が促進されたり逆に妨げられたりする。（訳は河野）］

関連性評価は感情表現とも深く相関することが予測され，言語研究にとって忘れてはならない項目である。

2　定延・田窪（1995）は，心的操作説の立場から「ええと」と「あのー」を分析している。次の例に着目してみよう。（なお，表記には適宜変更を加えてある。）

（ｉ）　A：今度の映画の監督って，誰だっけ？
　　B：ええと／あのー，レナード・ニモイ。

思い出しの過程は２段階に分けられ，まずモノ自体（のイメージや概念）を検索し，次にモノ自体の名前を検索するものと説明される。第一段階の検索は「ええと」で，第二段階の検索は「あのー」で表示されるとみなされる。この説明で納得しがたいのは思い出し過程の段階づけである。確かに，理論的にはモノ自体の検索とモノの名前の検索は別の過程とみなせるかもしれないが，話し手の意識実態としては両者は同時に，並行してなされる過程であろう。問題の映画についての知識（例えば，その主題・出演者・映像・音楽など）をベースにしてその監督を絞り込む作業に当たっては，モノ自体の検索とモノの名前の検索は，内観による限り，どうみても一体的な実態とせざるをえないであろう。また，「ええと」は，「あのー」とは異なり，話し手が演算領域確保の予備的な心的操作に入っていることを表すともされているが，このような付随的心的操作を設定する根拠には単なる仮定の域を出た議論の余地がある。

3　抑揚の実際形には上昇下降調や下降上昇調のような複合音調形がある。次のような例である。

（ｉ）　あああっ［RF］，花火だ！
（ii）　あああ［FR］，また雨だ。

本論では，これらは基本的な下降調と上昇調の単純な組み合わせとみなす。表示内容は，それぞれ前半の抑揚型の表す発話態度を後半の抑揚型の表す発話態度に組み込んで全体的なモダリティを形作っていると考える。(20)・(20′)・(25) の規定を先取りして述べれば，（ｉ）では，前半の上昇調は関連性の不確かさの表示である「関連性判断」の〈質問〉を表し，後半の下降調は「関連性判断」の〈主張〉を表す。すなわち，「この気づき（の対象）は考慮に値するものかどうかいささか疑問ですが，ともあれ私はそう言いたいのです」といった趣旨を伝えている。つまり，不確かさの裏書である。一方，（ii）では，前半の下降調は嘆きにまつわる「関連性判断」の〈主張〉を表し，後半は「関連性意識の判断」の〈質問〉を表す。言うならば，「私のこの嘆き（の対象）は十分考慮に値するものだと思いますが，あなたはそれに気づいていますか？気づいて下さい。」といった意趣を述べている。つまり，話し手の嘆きへの気づかせ，ないしは誘引である。

4　本論と並行する見方として，森山（1997）は「上昇イントネーションは，さらに『どうしたのか，何がおきたのか』というように，遭遇事態について，探索が未完了であるといった意味を表す」とし，さらに「もっと根源的なレベルで，話し手自身の探索的態勢 ── 逆にいえば情報としての非充足性 ── といったものを表示すると言えるかもしれない」（p. 80）と述べている。本論では，「話し手自身の探索的態勢」は，(52)のように，感動詞の対象が関連性をもつかどうかの自分自身への問いかけとして規定した。また，森山は上昇イントネーションは「最終拍に高い上昇がある」ものと限定している。ここまでは良いとして，問題が生ずるのは森山が「上昇傾向のイントネーション」を別に設定していることである。例えば次のような場合である。

（ｉ）　君子：好きにしたらいいがね。ネエ，朝ごはんどうする？
　　良明：うわーっ，そのセリフ久しぶりにきいたなァ。（p. 82）

ここでの抑揚の音声形は「仮に長く引っ張るような上昇」（ibid.）とされている。その表示内容は「探索的意味というよりは，例えば茶化すなど何らかの別の有標のニュアンスを表す」とし，さらに「素直に驚いたり喜んだりしているのではない，という意味が加わるのではないだろうか」（ibid.）と観察している。主張にも拘わらず，音声形に関しては，上昇傾向のイントネーションを上昇イントネーションから明瞭に区別することはできないと思われる。また，意味内容については，できるだけ森山の観察に沿って言えば，本来は下降調で「探索が完了している」と述べてよいところを，わざと「どうしたのか，何がおきたのか」と思わず言ってみたくなる趣旨を伝えているものと解釈できないであろうか。そう考えてよければ，ここでは上昇イントネーションの本来の探索的な意味をいささか「茶化す」ために用いていることになる。さらに言えば，「うわーっ」は疑いなく探索的な意味を表しうる。例えば次のような状況においてである。

（ii）　うわーっ，何これ？

以上，あえて上昇傾向のイントネーションを設定する根拠は音声形と意味の両面から見出しがたいと結論づけられる。さらに，枠組みに内在する根本的な問題は，何をどのように探索するのかが明示されていないことである。

5　定延（2015）は，主要な類の感動詞は結びつく内部状態に応じて韻律が変化するとし，（本論の分類名とは異なるが）「驚き」や「興味惹起」，「感心」の感動詞（「あ」／「あら」／「へー」など）は原則として上昇調か高平調（＝高平板調）で，「検討中」の類（「あの」／「うーん」／「えーと」／「さー」など）は原則として低い平坦調（＝平板調）で，「納得」・「応諾」の類（「あー」／「うん」／「えー」／「はい」など）は原則として下降調で表示されると述べている。しかし，これは原則とするにはきつすぎる。せいぜい傾向であり，個々の感動詞の個別的特性によると見るべきである。驚きの「ああ」，検討中の「うーん」などそれぞれの類の代表的項目が下降調・上昇調・平板調のいずれも取りうる事実から見て，基本的に特定の感動詞類に固有な抑揚型はないとみなすのが妥当であろう。ただ，ある種の偏りを示す場合は存在し，例えば「納得」・「応諾」の応答詞類（「うん」など）は上昇調を排除する。しかし，「否定」・「拒絶」の応答詞類（「ううん」など）にはそのような限定は見られないことも公平に捉えておく必要がある。

6　川上（1995［1963］）は上昇調に 4 種類，すなわち第一種「普通の上昇調」，第二種「浮き上がり調」，第三種「反問の上昇調」，第四種「強めの上昇調」を設定している。このうち最初の 2 種に注目すると，普通の上昇調では「文の最後の拍が上り坂になる」のに対して浮き上がり調では「文の最後から二番目の拍において既にほとんど上昇が完了し，あとはほぼ平らのまま文が終る」（p. 274）と特徴づけられる。また，浮き上がり調は普通の上昇調と共通の意味をもちつつも細かなニュアンスの違いがあると記述している。共通の意味とは「相手とのつながりを求める気持ちを表す」（p. 281）ことであり，ニュアンスの違いとは普通の上昇調に比べて「より軽い態度を表す」（p. 287）ことである。例えば次のような具現においてである。（以下の表示は筆者が適宜修正を加えてある。語アクセントは*で，またピッチは低・中・高・特高を順に L／M／H／H⁺ と表示する。L は平板調（Level）の略記でもあるので注意。）

（ⅰ）　a．そ*うなんですね（LH）
　　b．そ*うなんですね（HH）
（ⅱ）　a．ど*んなごちそう（LH）
　　b．ど*んなごちそう（HH）
（ⅲ）　a．*ビ*ールください（LH）
　　b．ビ*ールください（HH）　（（ⅰ）～（ⅲ）は pp. 286–287 より引用）

上の(ia)・(iia)・(iiia)は普通の上昇調，(ib)・(iib)・(iiib)は浮き上がり調とされている。本論の枠組みでは，普通の上昇調は関連性意識の判断の〈質問〉を表す上昇調とみなしてよいが，浮き上がり調は上昇調ではなく平板調とみなすのが適切であると考えたい。音声形については H の持続を重要視したい。また，表示内容は控えめな関連性をもつとする関連性判断の〈主張〉を表していると見たい。平板調は抑制的発話態度によって堅苦しさ・深刻さを和らげたり，緊迫性・現実性を弱めたり，語勢を弱めたりすることで親しみやすさや気安さ・気楽さを生み出すものであり，川上の言う浮き上がり調の「より軽い態度」とほぼそっくり重なると思われるからである。

上昇調，すなわち最終 2 音節中の LH は(iiia)のみが排除されるが，これは基底の語アクセント「くださ*い」が抑圧されても音調形の生成には関与することを示している。なお，上昇調は次のような実現形では完全に容認されることに注目したい。

（ⅳ）　ビ*ールください（LM）
（ⅴ）　ビ*ールくださ*い（HH⁺）

すなわち，まず，基底の語アクセントが抑圧された場合には，(iv)のような低上昇調 LM であれば(ia)(iia)と同様に容認されることである。次に，基底の語アクセントが表層化した場合には，(v)のような高上昇調 HH⁺ となることである。なお，LM と HH⁺ に対応する平板調はそれぞれ MM と HH であることに留意しておきたい（河野（2015）を参照）。

7　例えば，対応する英語の応答詞 yes と no は次のような並行的な現れ方をする。

（ｉ）　A：Are you hungry?
　　B1：Yes/No.［F］
　　B2：Yes/No?［R］

下降調の関連性判断の〈主張〉は同等である。上昇調には肯定または否定で返答しつつ「どうしてそのように聞くの？」と質問意図を引き出そうとする問いが含まれているが，関連性意識の判断の〈質問〉に包摂されるものである。ここでは yes/no の行動の違いはない。Yes/No そのものの分布は均等ではないが，こと抑揚現象に関する限り偏りはないとみてよい（O'Connor and Arnold (1973)，Bolinger (1986, 1989) を参照)。

参考文献

Bolinger, Dwight (1986) *Intonation and Its Parts,* Stanford University Press, Stanford.

Bolinger, Dwight (1989) *Intonation and Its Uses,* Stanford University Press, Stanford.

遠藤利彦 (2013)『「情の理」論：情動の合理性をめぐる心理学的考察』東京大学出版会，東京。

冨樫純一 (2002)「『はい』と『うん』の関係をめぐって」，定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』，127–157, ひつじ書房，東京。

川上蓁 (1995［1963］)「文末などの上昇調について」『日本語アクセント論集』，274–298, 汲古書院，東京。

河野武 (2011)『関連性モダリティの事象：イントネーションと構文』開拓社，東京。

河野武 (2015)「日本語イントネーションにおける上昇調の表示」『大妻女子大学紀要（文系）』47, 1–14。

河野武 (2016)「Yes と No：『〈好ましさ〉の期待』の充足・非充足」『大妻レヴュー』49, 57–72。

河野武 (2017a)「日本語応答詞の関連性モダリティ」『大妻女子大学紀要（文系）』49, 1–16。

河野武 (2017b)「ことばと感情：英語の間投詞」，高見健一・行田勇・大野英樹（編）『中島平三先生退職記念刊行物』，37–41, 開拓社，東京。

串田秀也 (2002)「会話の中の『うん』と『そう』── 話者性の交渉との関わりで」，定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』，5–46, ひつじ書房，東京。

森山卓郎 (1989)「文の意味とイントネーション」『日本語と日本語教育 1』，172–196, 明治書院，東京。

森山卓郎 (1997)「一語文とそのイントネーション」，音声文法研究会（編）『文法と音声』，75–96, くろしお出版，東京。

森山卓郎 (2015)「感動詞と応答」，友定賢治（編）『感動詞の言語学』，53–81, ひつじ書房，東京。

O'Connor, J. D. and G. F. Arnold (1973) *Intonation of Colloquial English,* 2nd ed., Longman, London.

定延利之 (2002)「『うん』と『そう』に意味はあるか」，定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』，75–112, ひつじ書房，東京。

定延利之 (2015)「感動詞と内部状態の結びつきの明確化に向けて」，友定賢治（編）『感動詞の言語学』，3–14, ひつじ書房，東京。

定延利之・田窪行則 (1995)「談話における心的操作モニター機構」『言語研究』日本言語学会，74–93。

Sander, David and Klaus R. Scherer (eds.) (2009) *The Oxford Companion to Emotion and the Affective Sciences,* Oxford Univeersity Press, Oxford.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition,* Blackwell, Oxford.

田窪行則・金水敏 (1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」，音声文法研究会（編）『文法と音声』くろしお出版，東京。

Wierzbicka, Anna (1999) *Emotions across Languages and Cultures: Diversity and Universals,* Cambridge University Press, Cambridge.